

「目覚めよ」と呼ぶ声あり

挽地茂男

(マタイ 25 : 1 - 13)

2018.11.11 日本基督教団千歳丘教会

古代のキリスト教会から伝わっている伝統的な聖書日課は、教会の暦に沿って聖書の朗読箇所を、つまりどのような時期にどの聖書箇所を読むかを定めています。ふつう三年で四つの福音書を全部読めるように配分されています。そのような聖書日課は、アドベントの直前に世界の終末をテーマとした記事や十字架の出来事を配置しています。最初、アドベント前にどうしてこのような箇所を読むのだろうと思ったりするのですが、じっくり読んでまいりますと、その意図が少しずつ分かってまいります。先週の永眠者記念礼拝にも、世界の終末をテーマとした箇所(1ペト4:7-11)を読みましたが、それとも内容的に関連する、マタ

イによる福音書の「十人の乙女の譬え」を、今日は、読んでみたいと思います。〔この箇所は千歳丘教会に赴任する以前に礼拝説教のご奉仕に招かれてまいりましたときに、ご一緒に読ませていただいた箇所です。〕

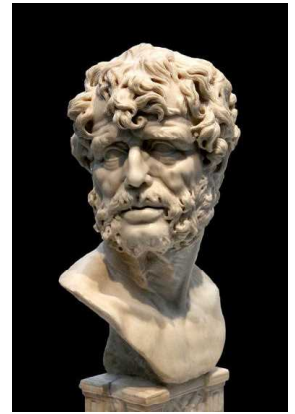
本日の聖書箇所になっている「十人の乙女の譬え」を含むマタイ福音書24章、25章は世界の終末(終わり)について語る主イエスの「終末の説教」の部分であります。〔**具体的データ**〕本日の聖書の箇所は(黙示録に出てくる要素が数多く見られるので)「黙示的説教」と呼ばれます、ヨハネ福音書を除く、マタイ、マルコ、ルカによる福音書(つまり共観福音書では)すべてこの「黙示的説教」が「受難物語」の直前に配置されています。この配置の意図は——以前「黙示的説教」を学びましたおりに申しましたように——共観福音書の基礎となるマルコ福音書では、きわめて明瞭であります。そしてマタイもルカも基本的にそれを引き継いでおります。すなわち、この配置は、①まず、この「黙示的説教」でやがて訪れる「世界の終わり」を描写しつつ、



次の章以下に示される、もう一つの終わり、「イエスの生涯の終わり」の描写、つまり「受難物語」の背景を描いているのです。つまり、二つの終わりが、ある種の緊張関係を持ちながら、物語の近景と背景（遠景）を形成します。「黙示的説教」は創造された世界の終わりという「決定的な時の到来」を告げ、それに続く受難物語は、イエス・キリストの生涯の終わりという「決定的な時の到来」を描きます。この二つの「終わり」は、二重写しにされていて（ダブルイメージで語られていて）、イエスの受難の出来事に終末論的な光を投げかけているのです。〔※世界の終末に起る「審き」*κρίσις* とは、その言葉の動詞形 *κρίνω* が「分ける」という意味で、終末にはすべてに神がすべての正邪を分け、白黒をおつけになることを意味している。「受難の出来事に終末論的な光を投げかる」ということは受難のとらえ方で、わたしたちの救いに白黒がつくという含意をもつ。〕今、宇宙や世界をマクロ・コスモス（大宇宙）と見、その秩序の縮約したものとして人間や社会をミクロ・コスモス（小宇宙）

と見る、古代哲学（ストア哲学）の表現を使うことを許して頂ければ、「世界の終わり」というマクロ・コスモスの動きと、一方の「イエスの生涯の終わり」というミクロ・コスモスの「終わり」への動きが、まるで遠景と近景のように重なっているのです。ですから、イエスの生涯それ自体が「世界の終末」を前提とした生き方、つまり終末を意識した生き方の典型としても見ることができのです。その生き方の重要な側面を本日の箇所は一つ譬えをもって語っているのです。

「十人の乙女の譬え」にまいりましょう。聖書の譬えの特徴は、後の解釈が加わって内容が複雑化している場合を除けば、ほぼつねに主張はワン・ポイントでなされています。ですからあまり細部にこだわりますと、そのポイントを逃してしまうことになります。この譬えの場合は、13節の「目を



セネカ（前1年頃-65年4月）



覚ましていなさい」という主張がそのポイントであります。しかし多少細かいことにも触れておきたいと思います。この譬えは、十人の乙女たちが、「ともし火を持って花婿を迎えに出て行く」と語っていますように、結婚式に題材を



とっております。新約聖書は、結婚を、神と人との終末的結合、その愛の完成を示す比喻として頻繁に用いています。実際には、当時の結婚式の習慣に関する詳細については不明な点が多いのですが、だいたい分かっているところに従いますと、当時の結婚式では、花婿が花嫁の両親の家に出向いて、花嫁をその両親から自らの伴侶としてめとり、そして今度は花婿が花嫁をともなって自分の両親の待つ家へと向かいます。この「十人の乙女」は花嫁と共にいて、花婿の到来を出迎え、今度は花婿の家に向かう花婿・花嫁の道行きを、夜であれば燈火を灯して、その道行きを照らし続け、そして花婿の家に到着すると、カナの婚礼のような祝宴が行われ、その祝宴の一

員として婚礼を祝福し、またその祝宴を支える奉仕者として仕えていた若い娘さんたちであったと考えられております。ですから、いくつかの英語訳の聖書では彼女たちのことを、ブライドメイド（花嫁の付き添いをする娘たち NRSV）と訳しております。またわれわれには奇異に見えます、夜の結婚式も、（結婚の祝宴だけでなく結婚式も）パレスチナでは、季節によっては酷暑を避けるために夜に婚礼の儀が執り行われることも珍しくなかったとされております。

さて2節では、この十人の乙女の内、五人は愚かで、五人は賢かったとされています。3－4節が、その愚かさと言賢さの違いを、愚かな乙女は油（予備の油）の用意をしていなかったとし、賢い乙女は「**ともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていた**」とことわりを入れて、その違いが花婿の到着に対



する「備え」のあるかないかであることを告げます。つまり終末の到来に対する「備え」のあるなしを「目を覚ましていること」の中心にしているのです。

さてこの譬えの十人の乙女は、愚かな乙女と、賢い乙女に大別されましたが、この乙女たちの愚かさとは賢さは、最初は、外見からだけでは見分けのつかないものであります。登場してきた十人は、全員が婚礼のためにやってきます。どの五人が愚かで、どの五人が賢明なのかは分かりません。また、十人全員が、花婿の到着を期待しながら燈火を輝かせています。ここでも、どの五人が愚かで、どの五人が賢明なのかは外見からは見分けが付きません。そして十人の乙女全員が、花嫁の付き添いの着るガウン〔ドレス〕を着ていたでしょう。ここでも、どの五人が愚かで、どの五人が賢明なのかは外



見からは見分けが付きません。しかしついに、その愚かさとは賢さの違いが、現実のものとして明らかになる時がやって参ります。

その時は5節に、花婿の到着の「遅れ」として説明されております。「遅れ」が出たときに、備えがある者と備えのない者がはっきりするのです。ちなみに花婿が遅れているあいだに、十人の乙女は（半分の五人だけではなく）十人全員が眠り込んでいるのですから、「目を覚ましていること」が睡眠をしないという意味でないことは明らかです。

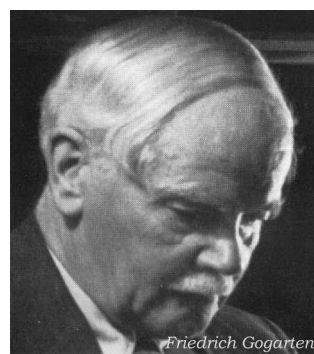
さてこの「遅れ」の要素は福音書の中で一番早く書かれたマルコ福音書にない要素であります。そして実はこの「花婿の遅れ」と表現されている事態は、ご存知のように、「終わりの日が来るのが遅れている」、つまり新約学の言葉で言えば、「終末遅延」とか、終末を告げるキリストの「再臨」が遅れている、つまり「再臨遅延」という事態であります。最初期の教会が直面した危機として、多くの場合、迫害や異端などが取りざたされますが、この「終末遅延」や「再臨遅延」の問題は、1世紀

のキリスト教会が直面した、教会の存亡を左右するような最大の問題だったともいわれております。マタイもこの問題に、取り組んでおります。新約聖書を読んでいすると、これについて様々な思索が巡らされており、新約神学〔つまり新約聖書全体の神学〕としては、四段階くらいの発展段階を取り出すことができます。

時間がありませんので、今は、神学の論議はさて置くとして、わたしたちの譬えの、13節「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから」というワン・ポイントのメッセージを中心に考えたいと思います。「終末遅延」とか「再臨遅延」のもつ大切な点の一つは、一世紀の信仰者に意識の転換を要請したということです。つまり「終末の遅延」は、終末論の問題を、終末がいつくるのか、という時期の問題から、「終末遅延」を前提とした信頼の問題へと中心を移動させたということです。友人を待つ場合を考えてみても判ります。時間になっても友人が来ない。殊にルースな友人の場合であれば、これは①「もっと遅れるな」

と考えるか、あるいはひょっとすると②「もう来ないな」と考えるかでしょう。逆に肯定的に考える場合もあります。③「きっと来る」と考える場合もあります。彼が遅れているのには、何か訳がある。電車でトラブルがあったかもしれないし、もしかしたら彼に何かがあったのかもしれない。とにかく可能な連絡をとって、決定的なことが分かるまで待とう、と考える場合もあります。つまり、これらの場合の「遅れ」によって両者の間の信頼の問題が顔をのぞかせてくるのです。私たちが誰を信じているか、という問題が明確化するのである。

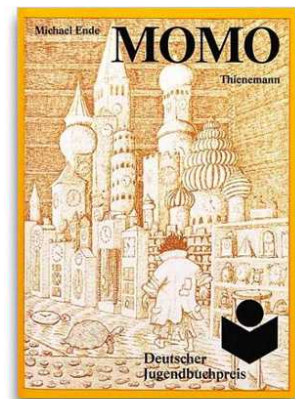
フリードリッヒ・ゴーガルテン (Friedrich Gogarten) という有名



な説教者は、この「十人の乙女の譬え」の箇所に基づいた有名な説教の中で、

キリスト者の本質を「待つ」という関係に招き入れられた者と語ります。われわれは全存在をかけて待つ。キリスト者の本質は待つことにあるからである。われわれの自分自身のなん

たるかを知ろうとするならば、それが今なのであるかということではなく、むしろ現在の自分の中に未来において完成されるべきあるもののあることを認めて、われわれが待っている方との信頼関係において、その完成を目指しつつ、嘆きつつ、待つ存在であることを知らなければならない。*「待つ」とは未来に対して徹底して開かれた、しかも慎みを込めたわれわれのありようだからである。この姿勢を、名付けて「希望」と呼ぶ。待つことにゆえに現実の愛の不毛に耐えることができる。報いられることの少ない愛に生きることができるのである。（Friedrich Gogarten, "Warten," im *Der Schatz in irdenen Gefäßen, Predigten*, Friedrich Vorwerk Verlag, 1960, S.330ff. * 以下は筆者による抄訳）



に緊張して、何でも計画的に、時間を無駄にしないように生きるということではありません。今や時間論の古

典的な作品の一つになった感のある『モモ』という児童文学のお話が、人間にとって時間がどういうものかを教えてくれます。作者のミヒャエル・エンデという人は、ルドルフ・シュタイナーのキリスト教神秘主義を通してキリスト教につながる人ですが、現代の資本主義システムの中で時間が非人間的なものに変質していることに警鐘を鳴らしています。〔ご存じの方も多いと思いますので詳しい内容は割愛しますが、かいつまんで言いますと〕この物語の主人公のモモは古代の円形劇場の廃墟に住む不思議な少女です。彼女の回りには、子供を問わず、大人を問わず、沢山の仲間がやってきて笑いと平和に満ちています。そんな不思議な少女モモの友人たちの住む町に「時間〔貯蓄〕銀行」の灰色の男たちと呼ばれる者たちがやってきます。そして人々に時間の無駄を省いて、時間を節約し、時間を貯蓄するように奨めるんです。例えば相手が床屋さんならば、おしゃべりをしながら一時間もかけて、散髪をしているのは時間の無駄ですよ、仕事は15分で済むのですから、無駄なおしゃべりはや

めて後の45分は時間銀行に貯蓄



しなさい。そうするとやがて時間がたくさん貯まって、貯まった時間が何倍もの利子を生んで、仕事を引

退するときには悠々自適の時間長者になっていますよ、と誘うんですね。人々は最初は、いぶかしく思っていました。が、やがて勧誘に乗って時間の貯蓄を始める人たちが出てきて、ほとんどみんなが時間を貯蓄するようになります。しかし、貯蓄をすればするほど、人々の顔からは笑顔が消え、とげとげしい声や態度が目立つようになってきました。そしてついには生きている喜びも、生きる意味も失っていきます。作者エンデは、時間銀行の灰色の男たちの時間の考え方を、「効率的な時間」つまりTime is money（時は金なり）という標語や、「早く正確に」といった一定時間に最大効率を上げることがをモットーする時間の考え方として描きます。しかしこうなると、人が時間に支配されていく、つまり現代社会が作り出した時間の仕組みに絡め取られるという面が出

てきます。エンデは、これに対してモモの時間を作品の中で「生きる時間」と呼んでいます。人が生きるための時間の流れ、テンポ、進み方や終わり方があるということです。人間らしい時間といたらよいのでしょうか。つまりこの『モモ』という児童小説は、時間論の衝突を描くのです。エンデは現代人の時間がどんどん「効率的な時間」に変わっていくことに危機感を覚えたのです。この作品には、エンデの文明批判がこめられます。さてこのお話では、時間銀行の灰色の男たちは、時間の支配を完成させるために、生きた時間に生活しているモモを最終的な標的に致します。灰色の男たちの危険がモモに迫ったときに、時間の外の世界から救いの使者がやって来



ます。それは近未来的な乗り物のようなものに乗った勇

士ではなく、一匹の亀なんです。「カシオペイア」という一匹の亀がやってきて、モモを導いて危険から遠ざけていきます。〔エンデはここで一種超越的な契機を導入

しているわけですが、それを神と呼んだり、キリストのように描くことはありませんが。彼の作品にはキリストや神の寓意と思われる登場人物がたくさん登場してきます。その〕カシオペアはいつものようにゆっくりと一歩一歩歩いているのですが、灰色の男たちはカシオペアとモモをとらえることができません。人々が仕事や買い物や娯楽で忙しそうに往来している町中の雑踏でも同じ調子です。一歩一歩歩いていますけれども、だれ一人ともぶっかかりません。灰色の男たちに追跡されながらも、ついにモモはカシオペアに導かれて、時間の境界線を越えて、マイスター・ホラ〔ホーラ〕の所に逃れてきます。「ホラ」というのは、ギリシア語（の ώρα (ホーラ) からとった名前／ドイツ語で「聖務日課」の小时課）で「時間」という意味なのです。そしてモモはこのマイスター・ホラの所で、人間一人一人の人生の時間が咲かせる「時間の花」を見ることができます。エンデは神という言葉こそ使っておりませ



んが、人々の生活時間の水平の線、横の線に対して、モモを導く縦の線、垂直の線を導入しているのです。

それでは、時にかなった行動を可能にするものとは何でしょうか。「時(間)」と「目を覚ましている」ことが決定的に鍵になっているのは「ゲッセマネの祈り」の場面です。これは「時」とそれに対する「目覚め」を語る典型的な物語です。やがておとずれる十字架の死を目前にして、イエス・キリストは深い祈りに入ります。弟子たちには、少し離れたところで祈っているように、「目を覚ましていなさい」という命令を与えて、ご自身は祈りに入られました。苦しく長い祈りでした。「わたしは死ぬばかりに悲しい。……父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」(マタイ26:38-39) 一度祈り終えて、弟子たちの所に戻ってみると、弟子たちは眠りに落ちていたのです。再び彼らに「目を覚ま



して、祈っていなさい」と命じて、主イエスは一人で祈りに向かわれました。再度弟子たちの許に帰してみると、彼らはまた眠りに落ちていました。そして三度「目を覚ましていなさい」と命じて、深い最後の祈りに入られました。「十字架の死」を神の御心と確信したイエス・キリストは、その祈りの中から立ち上がります。依然として眠りに落ちていた弟子たちを起こして、「さあ行こう『時』が来た」と言われます。垂直の線が主イエスを導きます。時のほんとうの姿は、祈りの中で見えてくるのです。

本日の箇所の 13 節。わたしたちもまた、「目を覚ましていなさい」と呼びかけられています。この譬え話は、「目を覚ましていなさい」と語りかけることによって、われわれの生き方を、世界の終わりとの関係において「**終わりから今を生きる**」ように迫っているの



です。「世界の終わり」と「イエス・キリストの生涯の終わり」にわたしたちの「終わりある生涯」とが三重に重ねられた時、この譬えのメッセージの深みに近づきます。「終わりを全うした主イエスの生涯」にわたしたちは「神の時」が成就したことを信じまた知っています。わたしたちは、キリストの十字架に神の最大の「時」が刻まれていることを忘れてはなりません。十字架は人間の時の流れ、つまり歴史に打たれた神の恵みの〈くさび〉なのです。いかなる歴史家もこれを否定することはできません。このキリストの十字架を通して、神の恵みに温められ、神の時の確実なことを確信して、未来を待ち望まなければならなりません。また、まもなく主の御降誕を、つまり主の最初の到来、アドベント・来臨を迎えるわたしたちは、第二のアドベント、つまり主の再臨を確かな落ち着きをもって心の中に受け止めなければなりません。そのとき、わたしたちは自分の日常にも刻まれていく、「神の時」の進展と共に、喜びをもって前進していくのです。ここでは、「待つこと」は積極的な「待

ち」に変化します。「終わりゆく世界」と私たちの一人の例外もなく「終わりを定められた生涯」とすでに「終わりを全うした主の生涯」を三重に重ねつつ、十字架上のキリストの、砕かれた体と流された血潮を通して示されている圧倒的な神の愛を信頼しつつ、また、わたしに与えられている「時」を祈りの中で確認し、聖霊に導かれつつその時を一步一步、歩んでいきたいと思います。

最後に、先週学びましたペトロの手紙一 4 章 7 節以下を読んで終わりにしたいと思います。この手紙は終末に向かって今を生きるキリスト者のあり方を次のように語っていました。

4:7 万物の終わりが迫っています。だから、思慮深くふるまい、身を慎んで、よく祈りなさい。

4:8 何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです。

4:9 不平を言わずにもてなし合いなさい。

4:10 あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに

仕えなさい。

4:11 語る者は、神の言葉を語るにふさわしく語りなさい。奉仕をする人は、神がお与えになった力に応じて奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して、神が栄光をお受けになるためです。栄光と力が、世々限りなく神にありますように、アーメン。

2018.11.11 日本基督教団千歳丘教会

